

粗悪雑誌と業績評価

上田哲史*

2021年3月25日

概要

本コラムでは著者の経験や主観に基づく、粗悪雑誌が選択される仕組み、粗悪雑誌を回避する方法について述べる。以下では粗悪雑誌についての定義は了解されているものと仮定した上で話を進める。研究分野によって実情と合わない点も多いかと思うが、ご容赦願いたい。

1 粗悪なものに手を出すことになる仕組み

粗悪雑誌 [1] に手を出してはいけない。これはもう 10 年近く業界で叫ばれているにも関わらず、現在に至るまで注意喚起を続けねばならない事態になっている。

通常のキャリアを積んだ研究者にとっては、研究成果を論文として出す機運が高まったとき、投稿先の雑誌が、適切なのか粗悪なのかの区別がつかない、という状況はあり得ないだろう。すなわち、国内外の学会に所属し、国際会議や研究会で発表する、ないしは各種プロジェクトに参加するなどして、研究仲間と議論していれば、コミュニティ内で自然と目指すべき雑誌などが判る。

研究倫理コンテンツは、昨今は各研究機関で視聴やテスト合格が義務となっているが、オーサーシップに関するルールが示されている。それに従い、共著者に投稿先についてのアセスメントを受ければ、粗悪雑誌がターゲットになるわけは無いと思われる。

戦略的に動いている教室・講座では、投稿可能、もしくは評価・査定可能な雑誌が限定されているかもしれない。研究者にとってはチャレンジングにはなるが、より高みを目指そうとする健全な研究組織であれば、粗悪雑誌との接点が現れようがない。

しかしながら、全世界で粗悪雑誌問題が顕在化してきており [2]、一向に収束する気配

* 徳島大学 情報企画・広報担当副理事 (情報センター教授・附属図書館 副館長) ueta@tokushima-u.ac.jp

がない。なぜこのようなことになるのか、日本の大学等研究機関の場合、以下の要因があるのではないか。

- 昇格・昇給などの処遇が、「一定期間内の出版数」に比例するよう規定されている、もしくはそれに準じる習慣がある。
- 「国際競争力」が曲解され、中身はさておき「英語論文」であることが要求される。
- 粗悪雑誌から、「特別に選ばれた」などとおだてたり、編集委員就任まで匂わせてまでの論文投稿募集メールが届き、本気にする研究者がいる。
- 講座のボスが部下や講座構成員の活動に無関心になり、もしくは干渉しないことが美德と勘違いし、出版活動に口を挟まなくなる。
- 若手は業績評価を気にしているが（特に任期が付いている、テニュアトラックならばなおのこと）、上記のように「中身より数」が支配的であることを読み取り、短期的視野で手っ取り早く「一定期間内の出版数」を得る手法を選択する。数さえクリアしていれば、中身や雑誌のフォーマットが改めて評価される機会は少ない。

というところであろうか。本来は多角的視野で時間をかけてやらねばならない研究業績評価を、一次元の整数値に代表させたことの弊害であるとも思える。

研究者個人は、自身の研究成果がより多い人の目に触れて評価される（称賛される）ことを夢見ているので、投稿先として真っ先に粗悪雑誌が選択されることは少ないと思われる。それでもこのような、望ましくない状況になってしまうのはやはり業績処遇・評価方法に問題があると言わざるをえない*1。「数を上げる楽な手段」が何の制限もなく選択できて、かつ、業績リスト上ではチャレンジングな仕事と粗悪雑誌論文は区別が付かないことに問題があるように感じられる。これでは、難問にあえて挑戦する人、向上心を持つ者、実際にやり遂げた者が、妥当に評価されない事態にならないだろうか？ 難問に敢えて挑戦する、なんてことはしなくなるのではないだろうか？

一方で、粗悪なところに一旦出してしまったら、将来とんでもないことになるという事実を知らないような無邪気な人も多いのかもしれない（とんでもないこと、の詳細は文献[1]を参照されたい）。

かつては論文出版となると一年近くかかる大事業であった。投稿は紙媒体・郵送であったし、著者、査読者と編集者間で書簡（郵送）が複数回、長期間交わされて、やっと論文は日の目を見た。すでに査読で長々と議論が交わされにも関わらず、掲載後も「誌上討論」などのカテゴリで、掲載内容について問題提起や応酬が続いたものである。したがっ

*1 徳島大学内部で実施されている業績評価処遇制度について述べているのではない。

て、投稿先は慎重に検討され、試行錯誤的要素は少なかったと思われる。

一方、インターネットの普及により、審査期間が大幅に（通信時間に関しては指数関数的に）短縮した。しかし、「一定期間内の出版数」に重きを置く評価が幅を効かせるなら、とにかく早い採録を目指すことになる（これはこれで、多重投稿など、別の倫理問題のハザードとなり得る）。すると、査読でネガティブな意見が返されたとき、内容の再検討などで時間を使うよりは、速やかに投稿先を変える戦略が最適となる。査読者と十分に議論を戦わせて主張を通す・論文を改善するというスキームは、すっかり苦手になってしまい、苦勞しそうな雑誌への投稿は避けられる、これが、粗悪雑誌が視野に入ってしまう力学ではないだろうか。

大学は研究組織でもあるので、学科やコース単位ぐらいで研究戦略を立て、出版先の制御をかける必要があるかもしれない。学術分野の多様性は広く受容する必要があるものの、組織として高く保つべきスペクトルはどれどれであるか、そのために絞るべきターゲット（雑誌）は何か、について組織の合意形成が必要となるだろう。その上で、ハイインパクトな雑誌への投稿を激励するとか、論文を通すための指南をするなど、もしくは、インセンティブとして昇給・昇任の条件にするなど、挑戦的な活動について組織的に支援し、正当に評価・処遇する必要がある。場合によってはターゲット外へのアクティビティは抑制する必要があるだろう。もう 30 年近く前になるが、著者の古くから付き合いのある某旧帝大の先生が技術系月刊大衆誌の連載に関して、「関係ない雑誌に載せるとマイナス査定なるんだ」と愚痴っていたのを思い出す。

2 粗悪雑誌を避ける・除去する

すでに図書館から、Scopus などの文献データベースを用いて、健全な雑誌についての情報を得る技術については周知されていることと思う。ところが、それらホワイトリストには登載されないものの、健全な雑誌も多くある。例えば、非英語の論文誌はほとんどそれらデータベースには載らないし、日本語論文だけで世界最先端が成り立ってる分野もある。よって、「投稿しないほうがいい雑誌」情報も重要である。

文献 [1] でも推奨されているが、ブラックリスト [3], [4] の活用が考えられる。これらの存在自体が名誉毀損などの訴訟リスクを抱えており、図書館が率先してこれらリストの利用を推薦するわけにはいかないそうである。しかし、粗悪雑誌を問題視している世界中の研究者が継続してメンテナンスしているこれらのリストは十分信頼できる情報源である。投稿前の念のためのチェックとして利用をお薦めしたい。もちろんグレーもしくはホワイトな雑誌が false positive として収録されている可能性は否定できないが、それら雑誌

はリストに載ってしまわざるを得ないような、不備や事件事故などの履歴があり、一考の余地がある。君子危うきには近寄らず、李下冠を正さずの姿勢は必要に思う。

研究不正の諸問題と合わせて、徐々に社会問題化している粗悪雑誌問題であるが、近い将来、簡単に大学の評価を揺るがしかねない事態に陥ると危惧する。ここに記述するのは少し躊躇ったが、全国の大学で同様な状況であるし、アマチュアでも今日・明日にでもすぐに実現できてしまうことであるので、敢えて警鐘を鳴らす、という意味で紹介しよう。

ブラックリスト [3], [4] から粗悪雑誌・出版社情報をすべて入手し、研究者総覧の業績データと突合させるアルゴリズムを組む。するとどの研究者がどれぐらい粗悪雑誌論文を出版しているかが判明する。どれも公開データであるのでこの処理自体には何ら問題は無い。かつて新聞社が大学に対し、設定不備なプリンタにアクセスできるようになってないか、不用意なデータがプリンタに残ってないかを調査し、記事にした。本学も不備が指摘されたことがある。そういった調査と類似なことである。結果は新聞ネタになりうるし、また、それは大学の評価を著しく傷つけることになるかもしれない。もしかすると、そんな事態になる前に、自律的に調査をしたほうがいいかもしれない。

粗悪雑誌利用に心当たりがある、もしくは粗悪雑誌について何も知らない方は、ぜひ [3], [4] を検索いただき、ヒットする業績はウェブ、総覧、Researchmap などから削除することをお薦めする。できれば当該出版社に連絡した上で取り下げること検討したほうがよいと思われる（なお、粗悪出版社は取り下げに高額費用を要求したり、そもそも認めなかったりする可能性もある）。

DX 推進施策の一環で、今後オンライン公募が一般化するようだ。これはむしろ歓迎すべきことで、業績リストとブラックリストとの突合が容易になる。粗悪雑誌が疑われる業績を検出するツールなども整備されるのではないかと期待する。

3 後悔先に立たず

最後に巷でよく聞く話を紹介して本稿を締めることとする。

- 学位論文審査において、参考論文(公刊論文)のジャーナル名で [3] のリスト検索するとヒットが無かったが、内容は稚拙だった。もしやと思い、ジャーナル名から出版社を拾い、再検索するとヒットした。
- ある人事書類に粗悪雑誌を発見。それらを全部カットしたら、近年の業績はすっかり少なくなり、上位職には推薦できなくなった。
- ある論文は投稿から採録決定までわずか3日であることが追跡できた。

- ある先生との共著が粗悪雑誌と判明。衝撃を受ける。本人に直接連絡すると本人はしばらく寝込んだ。業績リストからの削除を検討している。

参考文献

- [1] 和田 俊和, “粗悪学術誌／国際会議について—傍らの濁流—,” 情報処理学会誌, Vol. 60, No. 2, pp. 104–108, 2019.
- [2] 船守 美穂, “5000 名以上のドイツ研究者、ハゲタカ雑誌に論文出版,” NII オープンサイエンス基盤センター, Aug. 2018. <https://rcos.nii.ac.jp/miho/2018/08/20180802/> (2021 年 3 月 10 日閲覧)
- [3] <https://beallslist.net> (2021 年 3 月 10 日閲覧)
- [4] <https://predatoryjournals.com/journals/> (2021 年 3 月 10 日閲覧)